

西洋の落語

ファブリオーの世界

松原秀一





中公文庫

せいよう らくご
西洋の落語 ファブリオーの世界

定価はカバーに表示してあります。

1997年9月3日印刷

1997年9月18日発行

著者 まつばら ひでいち
松原秀一

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA, INC. / Hideichi Matsubara

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202940-6 C1198

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

西洋の落語

ファブリオーの世界

松原秀一

中央公論社

目次

第一章	ファブリオーとは？	9
-----	-----------	---

中世フランスに暮らす人々 9

『エテュラ』	16
--------	----

『ビュッフエ』	34
---------	----

『ロバと子羊』	44
---------	----

『やましぎ』	50
--------	----

『靴屋のバイイエ』	57
-----------	----

第二章	本格ファブリオー	81
-----	----------	----

『お下げ』	81
-------	----

『オーブレ婆さん』	102
-----------	-----

『ヴェール・パルフロワ』 118

『百姓医者』 127

『コンピエーニュの三人盲』 137

第三章 日々のいとなみ…………… 157

ファブリオーの舞台と背景 157

飢えと御馳走 161

『粉ひきと二人の学僧』 177

『コンの裁き』 201

『バラとエメ』 207

第四章 ファブリオーの衰退…………… 225

『ロバを引く農夫』 225

『議論で天国を得た農夫』 233

『溺れ死にから仲間を助けた律儀者』 240

「身分」に代わる「金」の力

244

崩れていく教会の権威

252

ファブリオーの変容

263

ファブリオーと写本

279

あとがき

292

文庫版あとがき

303

参考文献案内

307

索引

324

西洋の落語

ファブリオーの世界

第一章 ファブリオーとは？

中世フランスに暮らす人々

ヨーロッパ中世といったとき、人は何を思い描くのだろう。最近はやヨーロッパ中世についての本も多いので、中世と耳にして「暗黒時代」の連想をもつ人は減っているだろうが、ルネサンスがすぐミケランジェロやダ・ヴィンチを、またラファエロなどを喚び起こし、ボッカチオ、ラブレー、セルバンテスなどを思い起こさせるようには、決まった姿はないのではなからうか。

ヨーロッパも近くなって旅行に出掛ける人も多いので壮麗な教会や、驚くほど鮮やかな色彩に満ちたバラ窓を想う人もいるかもしれない。音楽好きなら『タンホイザー』『パルチファル』あるいは『トリスタンとイゾルデ』などの世界が頭に浮かぶか

もしれない。グレゴリオ聖歌やマシヨの音楽を想うのは、かなり中世に関心のある人だろう。

書店に行ってみれば、思いがけないほど多くの、中世のヨーロッパについての本が並んでいて、中世の教会や素朴な彫刻の写真などもよく見掛けるようになった。

あるいは三十年前でも、そうだったのかもしれない。佐藤輝夫氏がベディエの『トリストアンとイズー』を訳され、ベディエの武勲詩起源論を紹介され、鈴木信太郎氏がヴィヨンを紹介されたのも太平洋戦争中のことだし、ジルソンの中世哲学の邦訳も同じく戦前に出ていた。田部重治氏の『中世欧州文学史』という労作がすでに昭和七年に第一書房から出版されている。留学しているうちにいつしか中世の勉強をするようになって波多野精一著の『中世哲学史要』をひもとき、この優れた本が書かれたのが明治三十四年であることに目を見張ったりした。戦前のフランスのベディエ、アザール編の優れた文学史の邦訳が戦争中に企画され、まさに中世に当てられた部分が創元選書で三冊になって出たところで戦争の激化で中絶しているが、中世フランス文学の当時の最新知識は日本語で得ることができたのは特筆されて良いだろう。鈴木信太郎、渡辺一夫、佐藤輝夫、有永弘人など、フランス中世文学の先達たちの名が訳者として

並んでいる。

しかしルネサンスの作品はラブレールでもモンテーニュでもセルバンテスでも優れた翻訳によって接することができのに、十二、三世紀の中世ヨーロッパの作品は翻訳されているものはきわめて少ない。ダンテとフランスの十二世紀の武勲詩『ロランの歌』『ギヨームの歌』など、また『オカーサンとニコレット』、最近はマリ・ド・フランスの『レ』も邦訳されているが、クレティアン・ド・トロワの韻文小説や、リュートブフ、ジャン・ルナールの『とび物語』^{エグーラル}と歌物語『ギヨーム・ド・ドール』、ゴージェ・ダラスなど一つも翻訳されていないし、チョーサーが英訳し、ルネサンスの詩人がしばしば言及する『バラ物語』も平成八年になって篠田勝英氏の行き届いた訳書が出て初めて読めるようになったばかりである。

古代文明が東から地中海周辺に移ってギリシャ・ローマ文明の花を咲かせて、それに続いて北に文化の中心が移り、今の「ヨーロッパ」が形成され、ルネサンスが準備されたのは中世なのであり、近代文明の心性はここで育まれたのであった。

近代ヨーロッパの中心テーマの一つである恋愛にしても女性を男性以上の存在として、騎士が愛を貴婦人に捧げる「宮廷風恋愛」は十二世紀南フランスのギヨーム九世

の抒情詩に生まれ、アーサー王物語群を中心に育ったものであるが、中世の傑作とされる『散文ランスロ物語』もマロリーの英訳はあるものの『散文トリスタン』と共にようやく最近、その実体が明らかにされつつある。アーサー王やシャルルマーニュ大帝の騎士たちの心理や行動も読めば面白いし、作中にしばしば出てきて中世の読者の関心事であったに違いない裁判とその経過にも興味がもてないことはない。美しい貴夫人への精神的あこがれは長くヨーロッパの恋愛を規定したもので、それなりに面白い。しかし、そこに描かれた恋愛はあくまでも騎士と貴婦人ないし官女の間が主で、上流階級のものである。いや、上流社会の人々に理想として示されたもので、現実の生活の反映とはいえない。それはちょうど、中世から残る城を見学して太い垂木の広間で巨大な暖炉の巨大な炉に置いてある一抱え以上もある薪を目にしたり、壁に並んで掛かる重そうな武具や、身に付けたら動けそうもないような甲鎧を眺めるときに感じるような物珍しい世界であって、共感をもって近付いて行くわけにはいかない。

ある日、行きつけの古本屋の雑本を入れてある箱を漁っていると緑色の小型本があった。『ファブリオー選』と題されている。ファブリオーというのは十二、三世紀に韻文で書かれた滑稽談で、十四世紀まで書かれたが、イタリアで十三世紀に書かれ始

める散文の逸話集にだんだん取って代われフランスでも散文で書かれるようになって滅びたジャンルである。手に入れた小型本の選集には、今ではファブリオーに入れない作品も入っているが、テキストの中の難語に鍵括弧で訳語が入れてあり、いちいち辞書など見なくともすむようになっていく。クリーム色の紙にはつきりと印刷された活字も好ましい。仮綴じの本を開くと、最初の『マル・オント』から読み出した。素人でも読めるように作ってある本なので、次々と読んでいける。そこでは庶民も貴族も坊さんも人間のおろかさをさらけだし機転を利かせ、生き生きと暮らしている。暖かい日差しの下に草いきれの感じられる世界で、パリの真ん中にいる気がせず、親しみやすい人々の土臭さがかぐ思いがあった。朝から晩までヨーロッパの都会で暮らしている身にとっては、なにかほっと、くつろぐ気分であった。

ファブリオーの小型本は、自分の周りのパリの人々も、この本の中の十二、三世紀の農民や職人、僧侶、学僧たちのように、暮らしに追われながらも、同じように小さなことに喜び、小さなことに悲しんで孜々^{しし}と暮らしているのだろうと思わせた。

今まで勉強に読んできた武勲詩や、現代語訳を片手に読み出したクレティアン・ド・トロワの宮廷風恋愛小説などは中世のハレの部分であり、ファブリオーに描かれ

ているのはケの部分なのであった。中世の文学作品を読むと文学史という学問が十九世紀の産物で、したがって当時の価値観によってハレの部分に重点を置いていることを感じさせられるが、ファブリオーを読んでいると十二、三世紀の人々が、急に身近な存在になったのであった。

ファブリオーは百五十篇ほどが伝えられ十八世紀にすでに多くがバルバザンによって刊行された。一七七九年に出て、その後何度も版を重ねたルグラン・ドッスイーによる翻訳の四巻本も付録に中世語のテキストを多く含んでいる。十九世紀の前半にもメオンがバルバザンの刊行したファブリオーを再編し、ジュビナルなども補逸を刊行したが、その後の標準となったのは一八七二年から一八九〇年までかかって出された六巻本で、古文書学校教授で中世研究の長老モンテグロンが始め、ガストン・パリスの薫陶を受けた新進のガストン・レノーが加わって刊行した。この一八七二年はフランスの中世研究では記念すべき年でガストン・パリスとポール・メイエルが「フランス古文献協会」(SATF)を作り中世仏文学の校訂版叢書を刊行し、中世研究誌『ロマニア』を刊行しはじめた年であった。ファブリオーの六巻本がこの同じ年から出始めたのはきわめて意味深い。

この翌年には、フランス語研究に欠かすことのできぬリトレの『フランス語辞典』が刊行され始めている。リトレの『フランス語辞典』では取り上げられた単語の一つ一つに中世以来の例文が付けられていて、百年を経過した今も、きわめて興味深くそれを参照することができ。エミール・リトレはドイツで生まれたロマンス語比較文法の重要性をいち早く見てとって取り入れた学者で、ゴドフロワの中世フランス語辞典を世に出すのにも力を尽くした学者であった。一八八〇年から刊行され始めたゴドフロワの十巻の『中世フランス語辞典』はリトレに捧げられているが、リトレは第一巻が出た翌年の一八八一年八十歳で没している。

モンテグロン、レノー共編の『ファブリオー』六巻が中世文学の基本図書に含まれたことはまた、この六巻本の完結した三年後の一八九三年に、ジョゼフ・ペディエの学位論文『ファブリオー』を産むことにもなった。ペディエは二十世紀の中世文学研究の柱となって師ガストン・パリスの後を継いで武勲詩研究に、トリスタン伝説研究に新世紀を画すこととなる。ペディエの『ファブリオー』は、説話のインド起源説の一環として考えられていたファブリオーを、フランス独自のものとしてとらえる立場を打ち出し、文学作品としての自立性を認めさせる点で画期的なものであった。戦後